かゝみ

ワキ詞

是ハ安房の清澄より出たる僧
まゐらんずゝとこ甲斐國をさし
候かとりば此度甲斐國乃勝とん
さし
さしてゆり未ゞ清澄より
波の安房乃清澄立出そぞ浦乃
上哥
波ゞ里鎌倉山　急清き果めゐふ様
海ゞく捨る身なまで尽船しれり

一ゞ夜りの星の影草むしろの上を
花の上よりきく秋笛乃聲乃あきさ
流しはらそてこゆふ山たを
ゞ積て生涯にほよにくわく
鵲舟ハしもりし星の渡此
閨路をゆるさせ実や世中哉
ましとおもひろへきよそん

さらに天川ハ鵲渡り婚るの
詞
面白さしふ殺生をひかりの興さよ
づさへきくゆましなくやうを
月ふちり流て類星をなし帰
二の星と成てど乃空の上人も
月な夜星をさそひ近所ふに家
いる秋中はうのへ月影徳はを

上ヲ
いとひ闇ありかる秋を悦ぶ度
鵜舟るともしひの影消て
尾ゆ人まうり明し　寛（つ）き　上ヲ　つき脈
うや美しめのわきはづくいは
先非をさくる逃れがたりひも悦まる
鵜舟漕ぎ出で頭一めさけもぬ前
下
浪のそことゝ以ゆくなる無慙の鵜う

ゝ一三ゝ　韵
さてよく　やゞ是い住来乃人乃
半詞
彼いわんら　きもる住来乃僧
まそ人りゞ里まて前を借らん奥
我ふりやう所る老中はやとせ
ぎみそぬよしなかはかとよせて
この堂なりとまゝてる　三ヲ　実く
里中て流宿気か鵜うけ老い

あふミちを是ハいつなる人
まさに八佐るさんくこ秋を
鷄鳴りひゞきハりゞ清も月乃
かとミこの御堂ありあひ
肩入て鷄をはつのひハきこえ
くたしつぬひとそへハそや
かやきはまや抜雅まとしけ

新ひてんかうし穀生乃かそ
勿孫微くハあちはこわさを
はとま里寄はて館乃燕あり客
方家を清はよろんし佐花
まそハきわ那のしうゞ無年よわ
此りそゆて方家をとはり里乃
ほとありゞ更とまはてへうな

なく人　ワキツレ〽いかに申せば此人をこそ
思出し候事の候へ二三ケ年
先に此河下石和と申所を通りし
にかやうの鵜使ひに
行逢ひ殺生は無益なりの殺生なれ
由申て候ひしがよもや思ひ
かゝる家屋に泊りてこの人に宿一夜

けしうく様しそうひしから
シテ詞〽扨は其時の御僧にて渡りまゐり
ワキツレ〽さん候其時乃僧にて候は　シテ〽なふ
その鵜使ひははやう空しく成て
候へ　ワキ〽其は何故むなしく
成り候ふぞ　シテ〽いはれしなうう
この石川と数甚しくなわて候へ

天竺乃百穀のこと津ききのせや
人間ゞ諸をとふて法庭よ乃人
此中に穀は主源川とやま
どド三里ある里穀生薬勢の
所也ぞ分作人岩落よ雞法りひい
おかしく郷く此所よし流ひ
上津て雞をはりふかくき者の

しかるかりの神を見て歌さらんと
たく見しにう神をは蒼りも
志られしてみあは衆生ひとて
雞を法りふかく人にりは鳴
よわ一穀多生此理りまふのを
がれを去語と云あへ星ざ時
左右乃年をありとぞし雜穀生

崇神の御とも志ゝはた向後の
事をきゝけれはうとくゝ
ぞをありしも歎きなしめとも
ぞはく人も彼乃座る 下音 川
御巻物一 然へいさ巻へ心残の
ばたきつゞ天鶏はひ残亡老 詞
主る人 早詞 言語見断の事なきは

ござる大鼠陵織海小葉力乃鶏哉
はりみて御こ居らんあとなは
姫にとみひゆは座し 上詞 別る
又あこ座はござる葉力の鶏を
はり南は目小触人座し法を
とみて外りけき行へ 早詞 別は中は
上ゲ すそ小此東も宮こて鶏はりみ

はゆも眺めしのはゞりき葉末の
鵜を使りむ 呈上カル しかは他國乃
物語候 旅人の葉よわ
ぐりす者しひのうふりをなぞ
見ろ多乃かし おもちよ 上詞 志めむ
續松ふわ立て ワキ 藤乃衣のたぐ
しまな 上詞 鵜籠をひらききさえ出し

呈上カル 嶋津巣おろしあら鵜ども 此河
波ばざとはなせば 上音 面白の
ありさまやそこにも見ゆる
かゝり火に驚く魚を追まはし
クル かづきあげすくひあげ隙なく
魚をくう時は 三下 罪も報ひも後の 上入
世も忘れはてゝ 面白やご郎きふ

水乃よどならばいけすの鯉や
のぼるらん玉島川にあらねども
こあゆさばしるせゞきたり
がうしやうを忘れもはてし
ふしぎや篝火の燃えても
影の暗くなるは思ひ出たり
月になりぬる悲しさよ鵜舟乃

かゞり影消て闇路に帰る此
身の名残惜さをいかにせん
上音
河瀬の石をひろひあげめ
なる法乃御経を一石に一字
書付て波間に沈めとふらはゞ
などかはうかまざるべく
後シテ上
夫地獄遠きにあらず眼前の

瑰鬼悪鬼溜りてありしが彼は老
若年の昔しより江河に漁り
しなと漁りて罪おひたゝし
されば鉄札数をはくし金銭を
ちらしけるもふくごゑる乃庭に
詞
僧泊めしへのほしを一僧一宿の
功力にひかれうかびき仏によ

鵜飼と悪鬼心をやはらげて
鵜舟を弘誓の舟になし法此
法乃ちからのみのりのしるしにも
下
うかむまよひの
おかきうねやらも実のつ鵜
ありくあれて千里乃里も
雲りなくて真如乃月や出ぬらむ

上ヲ羊地

あらおそろしの地獄や奈落よ沈世

悪人を伝所ヨ鮹まへたまふなる

罪障おの其あるをせろよ　三重上　清浄無

刹益ありける極々魔を志ぞむ

上地

衆数をひくり無為に来りたる

実ありあさき地りひろなぬ乃

一字を極りる　三重上　ラ称名慶為の

言葉めでぬか御法と浸またわ

上地

経とはなをや如付く無　三重上　ラ称

廻向の功徳も　上地　二つもなく

三重上

三信なく　上　たゞ一乗の道ヨ

よって蔡落に流ろん果てうひ

のこる悪人乃備果を得ん事そ

此経乃力なしれや　下ロキリ　こ称を見

り称を世時至りぐるとひ定人
なれとも無上乃ゝ経をさゝ奉
として俗名を供養ひけるなしたる
その孫りひのれつゝ佛果
菩提小川ゝ満庵しかくし往来の
利益より他をたしくへ義ちる
なきく